

金次郎を支えた娘 「ふみ」の生涯

日光市二宮尊徳記念館



二宮ふみの描いた「大黒様」弘化二年「書簡写」の表紙部分
(二宮尊徳関係資料 国立国会図書館寄託)

二宮ふみ(文・文子・奇峰・松隣)

ふみは、1824(文政7)年7月、桜町陣屋(現真岡市)で父二宮金次郎・母なみの長女として誕生した。当時の「陣屋日記」を見ると、金次郎は、弥太郎・ふみ兄妹の教育について、男女の区分けなく対応している様子である。父は兄妹の成長の過程で、陣屋を訪れる者の中から書や絵の師を見出している。十代前半のふたりは、若林金吾(自修・欽行、不二孝仲間)や不退堂聖純(京出身の書家)から書物や書の指導を受け始める。

なお、ふみは、13歳の時から仕法で桜町を訪れた江戸の画家、大岡雲峰の手ほどきを受けている(後に師の一字を貰い「奇峰」と号す)。また、二十代初めには、烏山藩家老の嫡子大久保金吾(文隣)から、本格的に書の指導を受ける(一字を貰い「松隣」と号す)。

書画の素養を身に付けたふみは、「日光神領仕法雛形」の浄書や、父・兄の出張時に陣屋の様子を記録した「年中日記出入帳」・「当座金銀米銭出入帳」を綴るなど報徳仕法の実施に欠かせない存在となっている。

しかし、1852(嘉永5)年8月、金次郎の高弟、中村藩士富田久助(高慶)と結婚するも、翌年6月に死産、父が日光神領廻村中の7月7日に自身も病死。享年30歳という短い一生であった。

ふみは、幕末期に、独自の農村復興事業【報徳仕法】を生み出しそれを実践した父金次郎を、身近で支えた有為な女性であった。幸い、ふみの筆跡や絵が今日まで残されており、その才能を垣間見ることができる。



左：「竹に雀図」（夕集能争、朝飛遠啄） 右：「月に梅図」
二宮ふみ（奇峰）画（今市報徳二宮神社蔵 当館寄託）

大岡雲峰（成寛・次兵衛）

1765（明和2）年、柳川藩（現柳川市）藩士牛田忠光の子として誕生。後に旗本大岡氏の養子となり、1788（天明8）年に家督相続。江戸四谷に住み、高芙蓉・谷文晁に師事し、花鳥図を得意とする。南嶺派（長崎に渡来した中国清の沈南嶺の系譜）の画風に通じ、「四谷南嶺」と称される江戸で著名な画家。

雲峰は、1836（天保7）年2月に、親族の旗本斎藤鉄太知行所（現筑西市）仕法の件で桜町陣屋の金次郎を訪問。その際、13歳のふみに絵の手ほどきを始め、絵筆の購入や手本の提供など継続的に指導を行う。なお、1842年以降、高齢の雲峰に代わり弟子の佐藤雲嶽が指導している。

ふみの落款



大久保文隣（忠敬・金吾）

文隣は、鳥山藩（現那須烏山市）家老大久保治郎左衛門の嗣子。1836（天保7）年の金次郎の鳥山藩支援以来、父子で度々桜町陣屋を訪れ、師の教えを受けている。文隣は書道をよくし、ふみに手ほどきをする。特に、ふみ22歳の1845（弘化2）年3月、文隣がふみに書の手本を贈って以降、文隣がいる江戸又は鳥山とふみのいる桜町を、手本・清書・添削が頻繁に往復する。

「報徳訓習作」

左の資料⑥は、ふみの習作を、師の文隣が添削（薄墨）しているもの。題材は、「報徳訓」108文字の最後段11文字。中央⑤は、ふみから師への依頼文で、せわしく書いた作品であるが、手直しをしてほしいと願っている。また、左右の④は、ふみの作品に対する文隣の所感を、厳しい中にも温かみのある眼差しで述べている。なお、下段の5点は「報徳訓」全体の習作である。



「報徳訓習作」二宮ふみ書
（今市報徳二宮神社蔵 当館寄託）

「艱難、年々歳々不可忘報徳」

⑥ 此通り二而随分よろしく候

⑤ 此書右之振合一認め候而在、如何御座候哉、御覧二入候まま御面とう様なから何分何分

御直し被下候様願上候、世話世話敷認大不出来、御免被下申候

④ 御筆意者、甚ハケ敷餘り

投やりの御筆当りと、相見へ申候

右の絵は、ふみの習作で、左の大岡雲峰画・不退堂聖純賛の「富士山図」（天保7年作）を模写した作品。



「富士山図」習作 二宮ふみ（奇峰）画
（今市報徳二宮神社蔵 当館寄託）



「富士山図」大岡雲峰画・不退堂聖純賛
（『二宮尊徳関係資料図鑑』から）





「葦に鴨図」



「菊図」



「菊図」



「梅図」



「柳に蝙蝠図」



「蓮に鷺図」



「月に鶉図」



「竹に雀図」(雀暮集啼)



「蓮に鷺図」



「菊図」

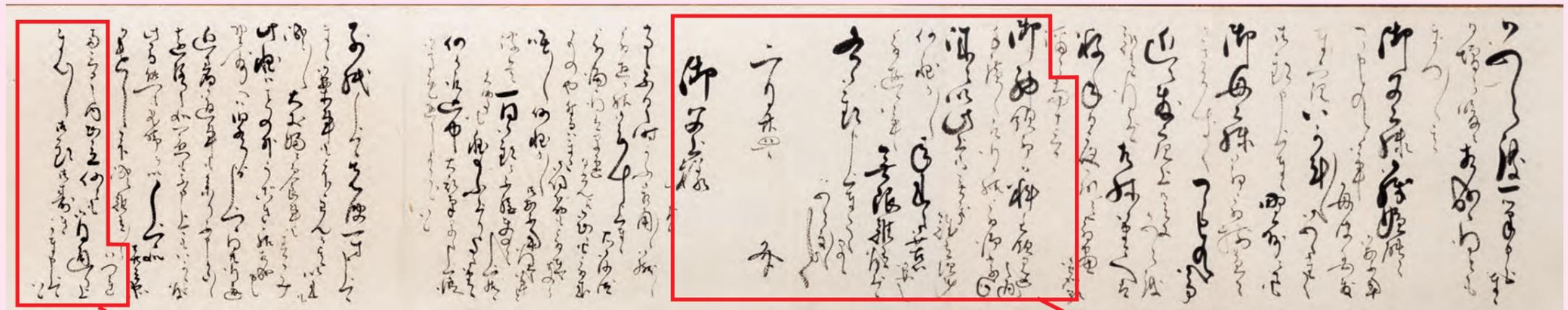


「燕子花図」

二宮ふみ画 (今市報徳二宮神社蔵 当館寄託)

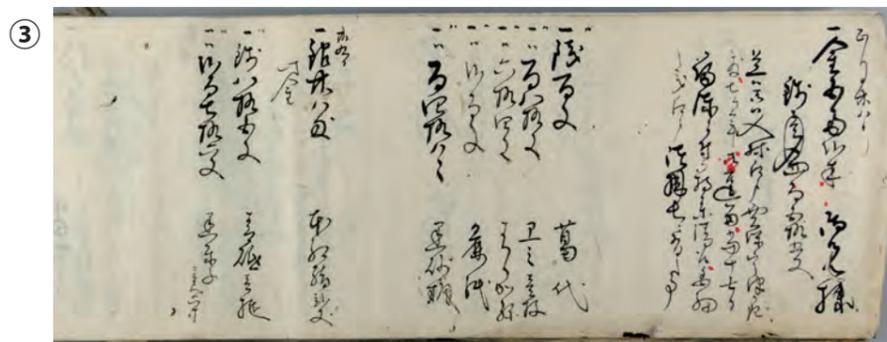
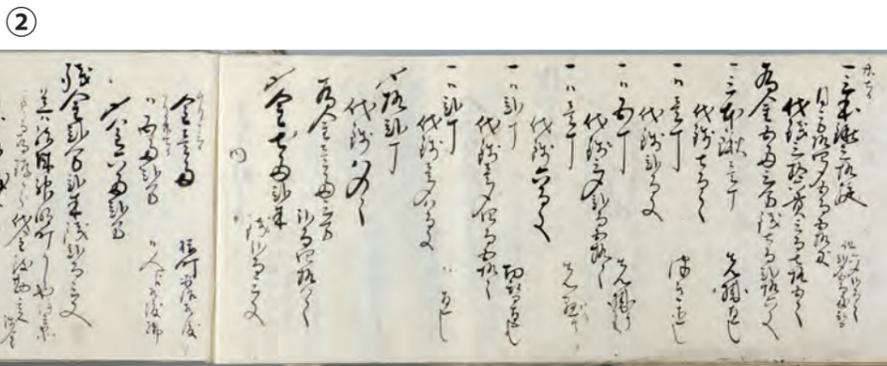
父への最後の手紙

ふみ書簡 (個人蔵)
 1853 (嘉永6) 年2月24日付けの書簡で、嫁ぎ先の奥州中村にいる妊娠中の娘ふみから、江戸にいる父金次郎に宛てたもの。父が、同月13日に幕府から念願の「日光神領復興仕法」を拝命したことに對する、娘の素直な喜びの気持ちを手紙で伝えている。
 また、追伸で、(実際には体調不良であったにもかかわらず) 最近食事もすすみ、胎児も動くようになり、近いうちに出産に備え中村から真岡東郷に里帰りすることを伝え、父を安心させようとしている様子が書き添えられている。
 やや円みをおびた流暢な字体に、濃淡をつけた文字は、見応えがある。



(中略)
 いつれ兩三日の内に立出し、何にも御目通りの上、まんまん御軟御壽き申し上げ奉るべく候 以上

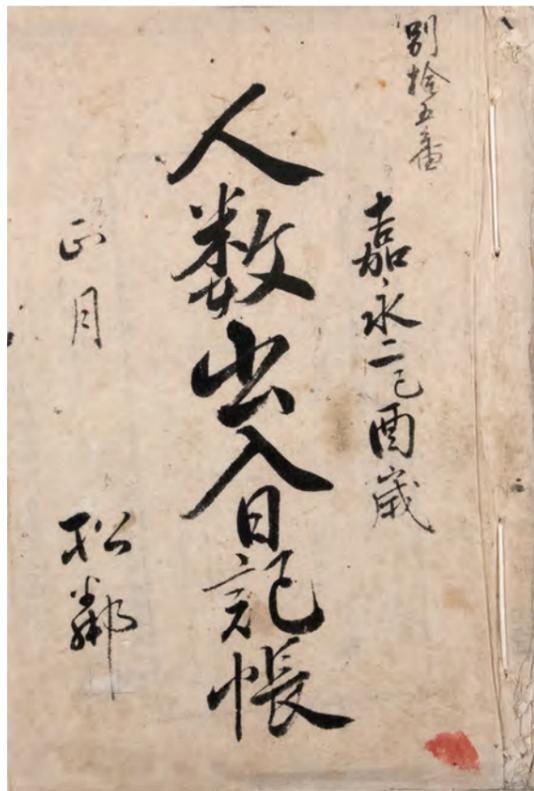
(前略) 当十三日
 御神領を初め、御料・主(私)領見込みの通り、手広く取行き候様仰せられ蒙り候趣、誠に以って此上も無き有り難き次第、何程か何程か、年来の御苦心御安し遊ばせられ候御事、限り無く有り難く存じ上げ候右御歎び申上げ奉りたく、早々 御めで度く かしく
 二月二四日 文
 御父上様



嘉永三年「当座金銀米銭出入帳」(部分)
(二宮尊徳関係資料 国立国会図書館寄託)

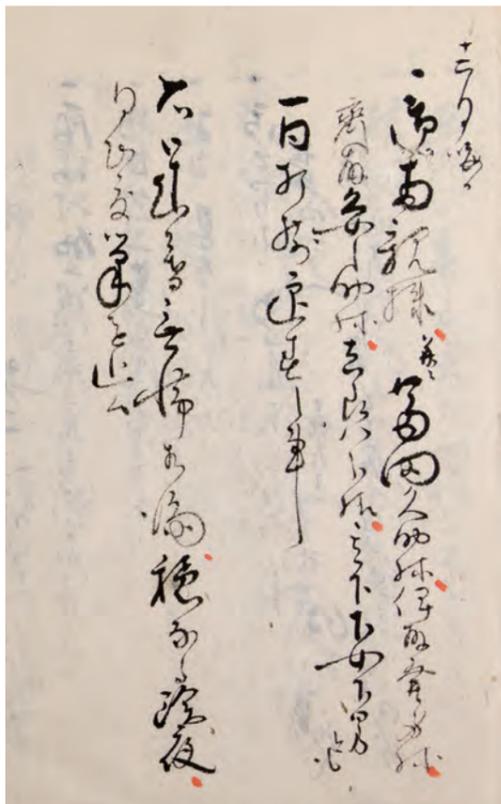
「人数出入日記帳」「当座金銀米銭出入帳」について
 桜町領報徳仕法の成果が上がり評判になると、金次郎は、各地への対応で長期の出張が多くなる。その間、陣屋内の状況を父に伝えるべく、弥太郎・ふみ兄妹が記録を残すようになる。それが、1838(天保9)年以降、来訪者を記録した「年中日記出入帳」(後に「人数出入日記帳」となる)と、陣屋の金銭出納簿「当座金銀米銭出入帳」である。
 1842(天保13)年までの記録は、弥太郎が主体的に記載し、一部をふみが手がけている。しかし、1844年4月、幕府から「日光御神領仕法雛形」の作成を命じられた金次郎は、弥太郎や門弟たちを伴い、江戸で雛形作成に取り掛かる。そのため、桜町陣屋の留守は、母なみとふみが守ることとなった。前年の1843年以降、弥太郎が江戸から東郷陣屋に戻る1850(嘉永3)年1月までの7年間、「人数出入日記帳」と「当座金銀米銭出入帳」はふみが単独で記載している。また、この間に桜町のふみと江戸の弥太郎は、それぞれの状況報告と両親の様子を百通近い書簡で交信している。
 ふみの文字は、漢字が多く、一ツ書きで、文体も男性的。つまり、漢文調の文章を駆使できる女性であったのである。

表紙には、書の師大久保文隣(隣)の一字をとった「松鄰(隣)」の署名がある。当時、ふみは東郷陣屋に在住(前年9月に桜町から移転)。



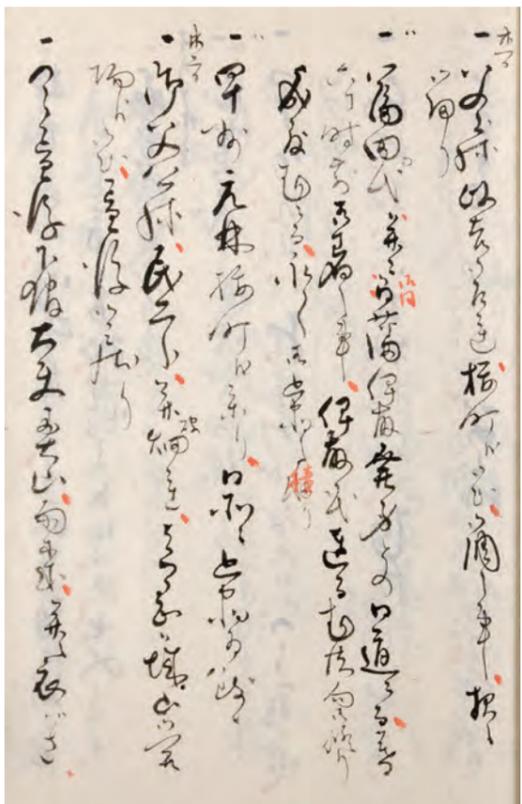
二宮ふみ(松鄰)筆 嘉永二年「人数出入日記帳」
 右上:表紙 右下:2月21~22日
 左下:12月晦日の部分
 (二宮尊徳関係資料 国立国会図書館寄託)

12月晦日の条



・父上様(金次郎)が政吉(後の福住正元)を連れて桜町に調査に向き、夜帰宅する。
 ・富田御氏(富田久助)が同藩(中村藩)の伊藤(東)発身を伴って夕暮6時前に東郷陣屋に到着。伊藤氏は趣法(仕法)向き修行を志願して来たので、長く宿泊する積り。

2月21日の条



①同(正月14日) 銭6百文
 富田久助と吉良八郎が青木村(現桜川市)に出張したが、深夜に及んだため宿泊した旅籠代
 正月26日 金3兩
 富田久助が、相馬中村藩趣(仕)法のため、在所(中村)に行くための路賃
 同 金1分2朱
 東沼村の清右衛門後家(困窮者)に屋根替手間代を下付
 ②正月27日
 結城の鍛冶屋に作らせた三本鍬(新品) 30丁と三本鍬(修理) 12丁の代金7兩2朱・銭203文の代金引渡しの経過と内訳
 ③正月28日 金5兩2朱・銭455文
 御兄様(弥太郎)が江戸西久保の宇津家屋敷に7年間逗留し、17日に東郷陣屋に戻った際、持参していた金銭を受け取った。詳細は、江戸の諸払帳に記してある

左中段②は、報徳仕法で重要な役割を担う農具の管理と、その代金の支払い記録である。なお、ふみは報徳無利息金や年貢米などの管理も行っており、確かな計算能力も備えている様子である。
 左下段③は、弥太郎が江戸から7年ぶりに東郷陣屋に戻った際の金銭精算の記述である。これ以降、再び陣屋記録は弥太郎が引き継いで記載する。

上に掲げた資料は、東郷陣屋の日常的な金銭出納帳の一部分である。表紙以外はふみの筆である。

左上段①は、金銭の出納ではあるが、短いながら門弟らの活動や村民への給付状況を具体的に記載している。

左中段②は、報徳仕法で重要な役割を担う農具の管理と、その代金の支払い記録である。なお、ふみは報徳無利息金や年貢米などの管理も行っており、確かな計算能力も備えている様子である。

左下段③は、弥太郎が江戸から7年ぶりに東郷陣屋に戻った際の金銭精算の記述である。これ以降、再び陣屋記録は弥太郎が引き継いで記載する。

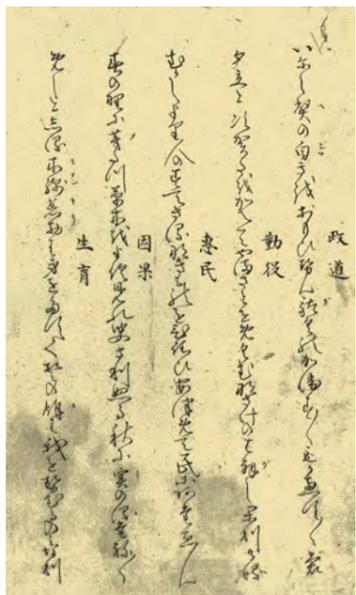
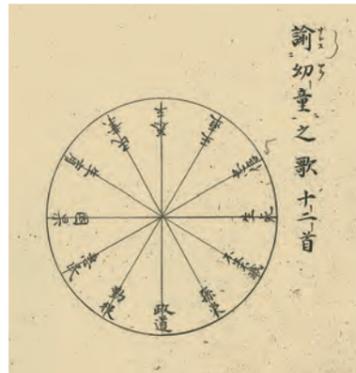
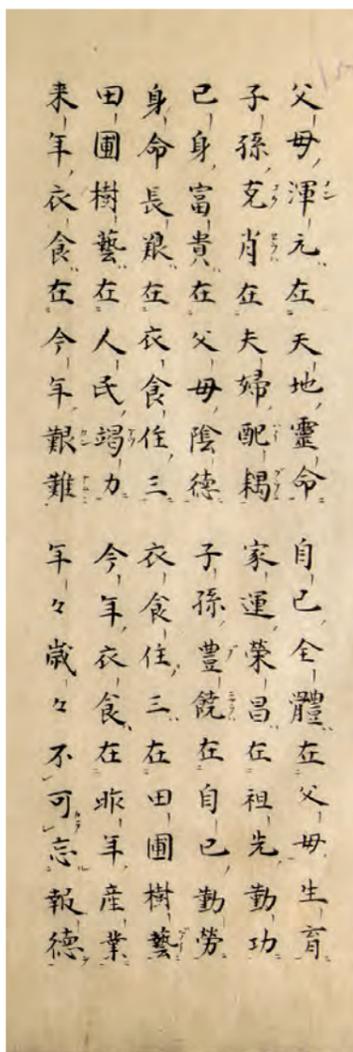
不退堂聖純（倉田耕之進）

1794（寛政6）年に公卿小倉家に生まれ、幼時に京都の岩屋山志明院に入る。20代末には書家となり、不二孝の小谷三志（金次郎の報徳思想確立に影響を与えた人物）も書の指南を受けている。

1834（天保5）4月から12月まで桜町陣屋に滞在し、金次郎の主著『三才報徳金毛録』（報徳思想の原典といわれる）の浄書をまかされる。その後1839（天保10）年まで、桜町・烏山・小田原等に断続的に滞留し、弥太郎とふみに書物や書の指導をしている。金次郎の教訓や道歌を揮毫し「報徳の道」の普及に貢献する。

『三才報徳金毛録』

三才とは天・地・人で宇宙間の万物を示し、金毛とは貴重なものを意味する。金次郎は、天道と人道の発生する過程を進化論的に説明し、万物にはそれぞれの徳があり、人はその諸徳と調和しながら生きるべきである、と説く。そのことを「一円」観に基づいた円図で示し、そこに「勤勞・分度・推讓」という実践の考え方を交えて「報徳の道」を説いている。後段では、「報徳の道」をわかりやすく説くための「報徳訓」や、道歌に託した「諭幼童之歌十二首」を収めている。



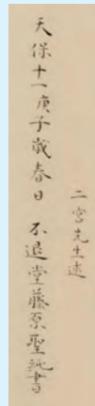
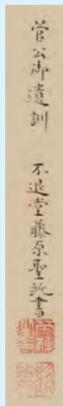
右：「報徳訓」（部分）
左2点：「諭幼童之歌十二首」（部分）
『三才報徳金毛録』（国立国会図書館寄託）より



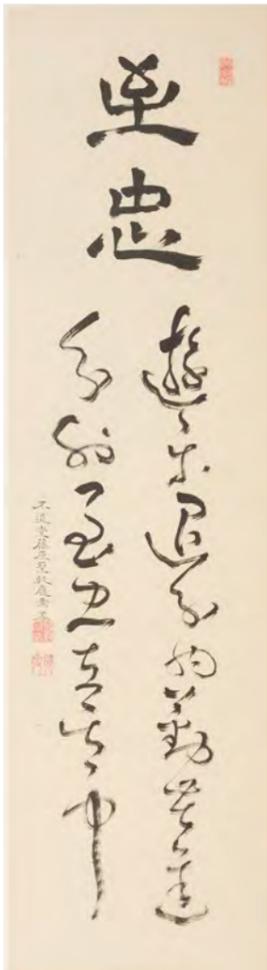
『三才報徳金毛録』
（国立国会図書館寄託）

不退堂の落款等

冠帽印



不忠 遊樂分外に進み、勤苦分内に退けば、不忠その中に在り



不忠 遊樂分内に退き、勤苦分外に進めば、至忠その中に在り

不退堂聖純書（今市報徳二宮神社蔵 当館寄託）

上段の「不忠訓」・「至忠訓」と下段の「不孝訓」・「至孝訓」は、それぞれ十五文字の漢文体の教訓。この教訓は、金次郎の「報徳訓」と同様に広く知られている。「貧富訓」に表現が類似している。「貧富訓」のうち、「貧賤」「富貴」の部分が「不忠」・「至忠」と「不孝」・「至孝」に置き換えられた表現となっている。なお「分」とは「分度」を意味する。

（参考）「貧富訓」
貧 遊樂分外に進み、勤苦分内に退けば、則ち貧賤その中に在り
富 遊樂分内に退き、勤苦分外に進めば、則ち富貴その中に在り

内容は、遊び楽しむことが自分の分度を越えてしまい、勤勞の苦しみにより得られるものが分度に足りなければ、自然と貧乏になってしまう。その反対に遊樂を分度内でおさえ、勤勞により得られるものが分度より多ければ自然と富貴となる。つまり、富貴となるためには、自分の分度を知り、それに応じた生活をするこ



不孝 遊樂分外に進み、勤苦分内に退けば、不孝その中に在り



至孝 遊樂分内に退き、勤苦分外に進めば、至孝その中に在り

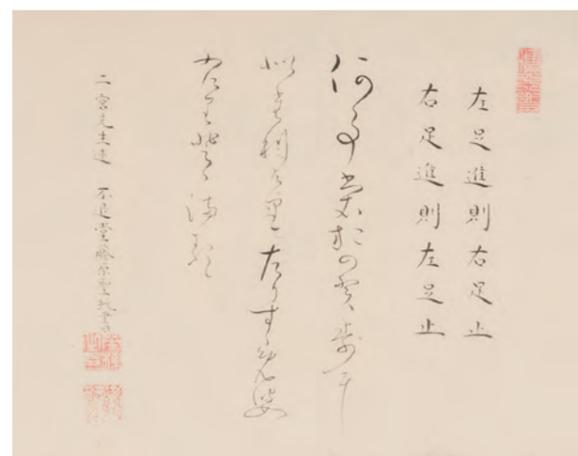
不退堂聖純書（今市報徳二宮神社蔵 当館寄託）



「龍」 不退堂聖純書（当館蔵）

この「龍」は、一文字の長さが1mを越す作品で、大文字を得意とする不退堂聖純の秀作の一つである。

左足進めば、すなわち右足止まる
右足進めば、すなわち左足止まる
何事もおのが歩に似たりけり、左りすすめば、右りとどまる
左足・右足と交互に動かして歩くように、一步、一步、大地を踏みしめて歩み、着実な生き方をするべきという意味合いである。



「尊徳道歌」 不退堂聖純書
（今市報徳二宮神社蔵 当館寄託）

金次郎は、報徳の思想を人々に啓発するために、「報徳の道」をわかりやすく説いた「道歌」や「教訓」を多数創っている。本資料は、その普及手段として、金次郎が1834(天保5)年頃から書家不退堂聖純にその「道歌」を揮毫させ、報徳思想の普及に活用した。



「尊徳教訓 可恐・可勤」 不退堂聖純書（今市報徳二宮神社蔵 当館寄託）



「尊徳教訓 可恐・可勤」 不退堂聖純書（今市報徳二宮神社蔵 当館寄託）

漢文体の対句で表した上段の4点は6行126文字で、下段の4点は7行98文字で「可恐」・「可勤」を表現した教訓書である。「可恐」…財を受けて、その身を樂しませるだけであれば、年々月々日々時々刻々と、分内の徳が減ずる。恐るべし。「可勤」…身を苦しめて、財を人に施せば、年々月々日々時々刻々と、徳が分外に増す。勤むべし。

| 西暦(和暦) | 年齢 | 二宮ふみ関係の主な出来事 | 西暦(和暦) | 年齢 | 二宮ふみ関係の主な出来事 |
|------------|------|---|------------|----|---|
| 一八二〇(文政三) | | 4月、金次郎(34歳)・なみ(16歳) 相模国足柄上郡柏山村で結婚 | | | 夏、文隣は、ふみの求めに応じ、金次郎道歌の手本を贈る |
| 一八二二() 四 | | 8月、小田原藩主大久保忠真の命で、分家宇津家の知行所下野国芳賀郡桜町領の現況調査を開始 | | | 12月、中村藩(陸奥国宇多郡坪田村・成田村) 復興仕法に着手 この年、江戸の兄弥太郎と妹ふみの書簡の往復多くなる |
| 一八二三() 六 | | 9月25日 兄弥太郎(実名「尊行」) 柏山村で誕生 | 一八四六() 三 | 23 | 春、ふみ(松隣)、「尊徳道歌集書抜三十六首」を浄書する |
| 一八二四() 七 | (ふみ) | 3月12日、金次郎、田畑・家屋敷・家財を売却 翌日なみ・弥太郎と柏山村を出発し、3月28日、桜町に到着 | | | 6月28日、「日光御神領仕法雛形」を完成させ、勘定所に提出 |
| 一八二八() 一一 | 5 | 7月17日、長女ふみ(文・文字・奇峰・松隣) 桜町陣屋で誕生 | 一八四七() 四 | 24 | 12月、文隣が、ふみに「千字文」(折本)等の書道手本を贈る |
| 一八二九() 一二 | 6 | この頃、金次郎は、「不孝」の小谷三三と盛んに交流 | 一八四八(嘉永元) | | 5月、金次郎(61) 真岡代官手附下命、東郷に着任(神宮寺仮住) |
| 一八三〇() 一三 | 7 | 正月、金次郎、桜町を出奔し成田山に参籠後、「二円観」に至る | 一八四九() 二 | 26 | 7月、金次郎、東郷陣屋に移る |
| 一八三三(天保四) | 10 | 4月8日、桜町陣屋に帰る、以降、桜町仕法順調に進む | 一八五〇() 三 | | 9月17日、家族も桜町陣屋から東郷陣屋に引越す |
| | 7 | 正月、3月、妻なみ(26) は弥太郎・ふみを同伴し、墓参帰郷 | 一八五一() 四 | 28 | この年の「人数出入日記帳」は、ふみ最後の手跡となる |
| | 10 | 8月、12月、なみ江戸で病氣療養、弥太郎・ふみも同伴 | 一八五二() 五 | | 1月17日、弥太郎が江戸から東郷に戻る |
| | 11 | この頃から5年間、若林金吾(自修・欽行) が桜町陣屋に逗留し、村の子供達に手習いを教える | 一八五三() 六 | 30 | 富田高慶の著書『報徳論』成稿 |
| 一八三四() 五 | | 4月27日、不退堂聖純(41) が桜町陣屋に来る、12月まで滞在 | | | 4月、7月、ふみ、真岡代官山内氏家内の帰府に伴い、江戸に滞在 |
| | | 9月、不退堂が、弥太郎(14) に書道手本「入木道點畫秘卷」贈る | | | 4月29日、弥太郎(32)、鉸(17、鉸子)と結婚 |
| | | 秋、金次郎(48)、不退堂浄書の『三才報徳金毛録』を著す | | | 8月28日、ふみ、富田高慶(39)と相馬中村で結婚 |
| | | 不退堂、この頃から金次郎の教訓や道歌を揮毫し、「報徳の道」普及に貢献 | | | 2月13日、金次郎(67) に幕府から日光神領復興仕法の下命あり |
| 一八三六() 七 | 13 | 2月、大岡雲峰(72) が、親族の旗本齋藤敏太知行所真壁郡仕法で桜町を訪問。ふみ(奇峰)、この頃から雲峰に絵の指導を受ける | | | 6月5日、ふみ、懐妊するが、郷里東郷で死産となる |
| | | 9月、金次郎、烏山藩に救急援助を行い、翌年、烏山藩仕法に着手 | | | 7月2日、金次郎ら、日光神領の第一回廻村を開始(7月28日) |
| | | 桜町領仕法(通算15年) 終了後も、金次郎一家は、桜町に継続居住 | | | 7月7日、廻村中、ふみ病死(享年30歳) 桜町蓮城院に葬る |
| | | 不退堂が、弥太郎に書体手本「六体帖」・「行書帖」(折本)を贈る | | | 8月9日、日光神領の第二回廻村を開始(8月17日) |
| | | 2月7日、小田原藩 金次郎(51) に仕法実施を発令 | | | 10月18日、金次郎、一月病臥の後、日光を出立し、東郷に帰着 |
| | | 2月、4月、弥太郎(17)、小田原に逗留し、不退堂に書を習う | | | 4月、今市報徳役所完成し、金次郎一家と門弟ら東郷から引越す |
| 一八三七() 八 | 14 | 不退堂、9月から翌年にかけて、烏山藩に滞在 | 一八五五(安政二) | | 10月20日午前十時頃、金次郎、今市報徳役所で死亡(享年70歳) |
| 一八三八() 九 | 15 | この年から父・兄の不在時、ふみが「年中日記出入帳」等を記述 | 一八五六() 三 | | 富田高慶が『報徳記』を著す(翌年推敲して八巻とする) |
| 一八三九() 一〇 | 16 | 6月1日、中村藩土富田久助(27歳、高慶) が桜町陣屋を訪れ、9 | | | 戊辰の年正月、鳥羽伏見の戦い、4月以降、戦火が日光周辺にも及ぶ |
| | | 月末頃、金次郎から入門を許可される | 一八六八(慶応四) | | 4月下旬、弥太郎家族・門弟家族ら相馬中村藩へ避難仕法書類とも |
| 一八四二() 一三 | 19 | 10月2日、金次郎(56) 老中水野忠邦により、幕府に登用される | 一八七一(明治四) | | 6月6日、弥太郎が中村藩に移り、日光神領仕法打ち切り |
| | | 秋、雲峰の弟子佐藤雲嶽が桜町陣屋を訪問している | 一八七三() 六 | | 7月1日、母なみ(波子・歌・歌子) 死去(享年67歳) |
| 一八四四() 一五 | 21 | 12月、烏山藩が菅谷八郎右衛門の復職を認め仕法を再開。この頃から、家老大久保忠勤嫡子金吾(忠敬・文隣)も桜町陣屋に出入する | 一八九〇() 二三 | | 12月1日、兄弥太郎死去(享年51歳) |
| | | この年、不退堂は、仙台支藩片倉家の白石藩に召抱えられる | | | 富田高慶が相馬中之郷石神村の二宮家の隣に住み、二宮尊親を後見 |
| 一八四五(弘化二) | 22 | 4月5日、金次郎、日光神領仕法雛形の作成を受命(江戸にて着手、金次郎は、翌年から桜町のふみにも浄書を依頼する) | | | 正月5日、富田高慶死去(享年77歳) |
| | | 3月、大久保文隣が桜町陣屋を訪れ、ふみに書の指導を行なう | | | |
| | | 以降、桜町と江戸又は烏山の間を、文隣手本とふみ清書が往復する | | | |

